令和５年度第３回躍動カフェ（神戸地域）議事要旨

１　概　要

（１）テーマ：多様な人がいきいき暮らし、賑わいを創出し続けるまちKOBE
（２）日　時：令和５年10月７日（土）13:05～16：00
（３）場　所：神戸高校同窓会館　２階ホール（神戸市灘区城の下通１－５－３）
（４）参加者：齋藤知事、神戸地域に在住・在勤し、多文化共生、子育て・教育、福祉、観光交流など各方面で活躍している方　15名

２　知事開会挨拶

・ 知事就任から２年となったが、対話と現場主義のもと、県民の皆さんから直接いろいろな声や意見を伺い、それを県政に反映させていきたいという思いをもって、躍動カフェを実施している。
・ コロナがようやく２類から５類へと移行し、マスク無しで本日無事に開催できることをうれしく思う。
・ 神戸は様々な文化やルーツを持つ方が暮らす多様性に富んだ地域。多様な文化や考え方をみんなで包摂しながら地域を盛り上げていくということは、SDGs を推進する上でとても大切なこと。限られた時間ではあるが、有意義な意見交換をお願いする。

３　意見交換

（ファシリテーター）

・ 本日のテーマは「多様な人がいきいき暮らし、賑わいを創出し続けるまちKOBE」。前半は「多様な人がいきいきと暮らす神戸地域」、後半は「賑わいを創出し続ける神戸地域」と分けて意見交換を行っていきたい。
・ 神戸も人口減少が顕著で、今年、人口150万人を切るか切らないかという話もある。人口ももちろんだが、活力ということで見ていくと、関係人口・交流人口を増やすことも含めた活性化が必要だと思っている。
・ まず「多様な人がいきいきと暮らす神戸地域」というテーマについて。本日ここに参加されている皆さんも、子育てをされている方や障害をお持ちの方、海外出身の方がいらっしゃるが、皆さんがされている活動の中にもテーマのヒントがあると思うので、活動を踏まえご発言願います。

（参加者）

【「小さな居場所」からの出会い・交流からいきいきと】

・ 私どもの団体では、在宅訪問での支援をしているが、ミニデイサービス事業をした時に、高齢の方が弱っていたのが、通う所ができ、交流するおかけで、みるみる元気になっていくのを目の当たりにし、出かける場所が必要だというのを実感した。
・ その後、地域の方々と協力して「居場所」づくりというものを始めたが、「居場所」

には、小さなお子さまや障害のある方、時には不登校の児童などいろんな方が来られ、そういった交流の中で、地域の活性化ができていると思っている。スタッフも「居場所」での活動を通じていきいきしている状況にある。

・ この「居場所」で、人と出会い、生きがいを見つけ、自分のまちに愛着を持つことで、自分の地域を大切に、その場所で最後まで生きようと思ってくれればと思い、活動を続けている。

（ファシリテーター）

・ 兵庫県の県民意識調査では、神戸エリアは他の９県民局に比べ、いわゆる近所付き合いができていない、隣近所に助けてもらう人がいない、といった回答が多いとのこと。その中で、神戸という地で交流できる場所をつくるという重要性を感じた。

（参加者）

【障害者の権利と責任、神戸の魅力「ちょうどいい」】

・ 大学、社会人と８年くらい東京、関東にいた私が思う神戸の良いところは、「ちょうどいい」ところ。裏を返すと、「中途半端さ」。東京ほど規模は大きくない。人々の関係性が希薄だとも言われるが、東京と比べると地元の愛着を感じる。そのいいところを取っていければいいのでは、と思う。

・ テーマについて、２つ鍵になると思っていることがある。１つ目は、私自身、障害の当事者であるが、障害者にも「権利と責任」があると考えている。「福祉」という話になると、「権利」を主張する側の議論になっていて、「責任」が置き去りになっている。だから私は、常に障害当事者であり、元健常者として、自分のできないことだけを行政や企業へのお願いとして話すようにしている。そうすることで、人が集まってくれている面がある。

・ ２つ目は「ちょうどいい」というところに繋がるが、兵庫・神戸では企業と組みやすい側面がある。東京では会社の規模が大きく、持ち込んだ企画も交渉中に消滅しやすい印象がある。その点、神戸では企業としてのパワーやブランド力があり、我々のような団体とも組む機会をいただける「ちょうどよさ」がある。この関係性をもっと使っていけたらという思いがある。

（知事）

・ 「小さな居場所」はすごく大事だと思う。今、学校現場で不登校が非常に増えているという問題で、クラスの中で登校できていなかったり、遅刻してきたりする生徒さんがいる。こういった不登校の問題について、本来は学校に行っていただければ良いが、なかなか行けない生徒さんにも、分野別の居場所というより、様々な人が交流できる居場所が必要ではないかと思う。そういった居場所がもっと増えていけばいいし、行政としてどういう関わりができるか考えていきたい。

・ 障害者の「権利と責任」の話、当事者としておっしゃるのはすごく勇気のあることだ

と思うが、大事な視点に感じた。
・ 神戸はおっしゃるように「ちょうどいい」が魅力だと思う。

（参加者）
・ 中途半端ではなく、どうやったら“ちょうどいい”にしていけるかが課題。神戸の差別化ポイントというには難しいなと感じる。神戸の魅力をどう伝えていけるか。

（知事）
・ たぶん「ちょうどいい」のが（神戸の魅力として）いいのではないか。兵庫県は観光もオーバーツーリズムになっていないし、今でも元町は普通に車で行けて、駐車もできる。「ちょうどいい」といえるのではないか。それが兵庫・神戸の売りであるように思う。これは、住んでもらわないと分からないかも知れない。

（参加者）
・ しかし、大阪や京都になくて、神戸でなくてはならない理由は絶対必要。
・ 私は須磨海岸をユニバーサルビーチとして盛り上げ、神戸の差別化ポイントを海でつくるということに今後も寄与したい。

（知事）
・ 須磨海岸は、私のソウルビーチ。私が小さい頃は遊泳エリアなどなかったが、今はかなり安全になって、カフェスペースもできて、非常に賑わいができている。これから楽しみなエリアの一つとなっている。
・ 先ほどの「小さな居場所」の話だが、活動する施設でも不登校のお子さんがおられるのか。

（参加者）
・ 不登校のお子さんはそこまでいるわけではない。高齢者がメインの施設となってしまっており、入りにくいと思われていることも想定されるので、今後は（子ども向けの）イベントを開催するなど、来やすくなる何らかの取組が必要かなと思う。

（知事）
・ 高齢者へのサポートで県が課題にしているのが、「はばタンPay＋（プラス）」。デジタルクーポン付き商品券のプレミアム率が25%（一般枠）と人気のあるものだが、スマホを使えないといけないので、高齢者の方からは、紙媒体の方がいいという声もいただく。ただ、いろいろなことを考えると、デジタルでやっていく方がいろんな店が参加しやすくメリットがある。そういったデジタルでのサービスを今後どのように周知していくかが課題となっている。
・ 例えば、高齢者のコミュニティを運営する方々にも、何か一緒になってやってもらう

ことができればいいいかもしれない。高齢者が置いて行かれることのないよう、デジタルの多様性を発揮しながら、きめ細やかなサポートが広がってゆく枠組みができればいいなと思っている。

（ファシリテーター）

・ 次に、子育て環境の充実ということで、様々な方がいろいろなアプローチをされていると思うが、取組について伺いたい。

（参加者）

【多様な人が混ざり合うまち 長田】

・ 元々住んでいた東京から神戸に移り住んで、東京とは異なる「自然に色んな人が混ざっている長田」に出会った。当時は単身であったが、今では二児の母となり、この長田の環境であれば、自分なりにいい子育てしながら働くことができそうだと思った。
・ 教育という切り口で、人に頼ったり、子どもたちがいろいろな障害があったり、不登校の子も多いが、みんな家族のように混ざり合って暮らしている。そして、そこに入ってきたいという方のために、バーやゲストハウスを運営し始めた。人を頼る経験をしたことがない方はここに来て、とてつもなく感動される。
・ 神戸は（淡路）島と山と海が近く、様々な暮らしを自分で選ぶことができる。大人たちがのびのびできる環境は子どもたちにも良いこと。
・ 日々の暮らしをどうしていくかということが大事。日常の暮らしがどうしたら豊かになるのか、子育て・教育の活動を通して大人にこそ考えてもらいたいと思い、活動している。

（ファシリテーター）

・ 引き続き子育て環境について。私も子どもが熱を出して働きに行けないということがあるが、そういう経験もありつつ、企業という組織の中でキャリア形成をしてきているお二人に話を伺いたい。

（参加者）

【子育てにおけるネットワークの大切さ】

・ 私は双子が生まれた瞬間、これはもう働けないと思った。地域のネットワークで繋がっていたママさんがおり、もうダメだと思って連絡すると、人としてすごく身近なアドバイスをもらい、とても楽になった経験がある。
・ 働いている中で海外の方の子育ての話を聞いたり、他企業のママさんと交流したりする機会もあった。それらの話で取り入れられるところは取り入れて、これまでなんとかやってきたように思う。
・ 現在の若者の子育て観は、これまでと違う子育て観、キャリア観があるように思う。その中でも人と人とを繋ぐことで、子育てをしながら自分もほかの人を支えるという

ようなことができると思う。
・ そうしたネットワークは非常に大事で、すごい人でも実際に話をしてみると身近に感じることができる。

（参加者）
【働き方に対するアンコンシャス・バイアス】
・ 私も 10 年ぐらい前に２人の子どもを産んだが、仕事は続けられない、とかなり諦めていた。なぜかと当時のことを考えてみると、子どもの保護者会の役員になったとき、６人の役員のうち３人が働いている方で、３人が専業主婦だった。こんなに働いている人が少ないのかと衝撃を受けた。それが神戸の現実かと思った。女性が働きにくく、働くためには何が足りないのか考えてみると、それは、アンコンシャス・バイアス（無意識、思い込み）という「呪い」が関係していると思う。
・ お母さんはこうでなければならない、バリバリとキャリアを積んでいかなければならない、といった「呪い」がそれぞれのいきいきと働くということを邪魔している。世代を問わず、誰もが、思い込みを一度落ち着いて眺めてみる習慣をつけなければ、女性に限らず、外国籍の方の活躍も進んでいかないのではないかと思う。
・ リケジョ（理系女子）の交流会は、企業として人が採れない、女性社員が採れないという状況があり、始めた。今は、「この地域でリケジョが頑張っている」、「この地域で働くのが素敵」ということが、すごく注目されていると感じる。企業単体でできることは限られており、（企業の枠を越えて）地域全体で活動していくことが必要だと感じている。

（知事）
・ 長田でのバーやゲストハウスなどの活動はどのように運営しているのか。

（参加者）
・ 会社で企業と一緒に仕事しながら生計を立て、それとは別にコミュニティ作りは任意団体でやっている。
・ ゲストハウスは夫も私もオープンな性格なので、以前から家に近所の高校生や子どもたちが来ていたので、地域の人たちが混ざり合えればと思い、この８月半ばから開いている。今は、夫の会社が運営をしている形となっている。
・ 今日この後も、２組の家族が来て、一緒に夜ご飯を食べながらお話することになっている。いろいろな支援があっても、心の本音を出せないと、なかなか解消されないものもある中で、弱音のようなことを言い合うことで、次に繋がっていく場作りができれば、と思って取り組んでいる。

（知事）
・ 企業のお二方も子育てをしながら仕事をされている。比較的大きな事業者さんでも触

れられたような壁のようなものを感じておられる。兵庫県は９割以上が中小企業。（女性活躍の支援など、中小企業にも）もっと広げていくために県としてどうすれば良いか、トライアルしている。

（ファシリテーター）

・ 躍動カフェは今回で３回目だが、過去に開催された阪神南と淡路ではなかったテーマである「多文化共生、外国人支援」の話題に移りたいと思う。

（参加者）

【多文化共生とは理解すること】

・ 大学時代に社会起業学科というところで学び、その中で、生きづらそうにしていた在日アジア人に出会ったのがきっかけで、アジアンバルを始めた。料理好きだったので、その方と一緒に屋台をしようとノリで始めたのが、今こうやって店舗となっている。
・ 生きづらさを考えた時に、いろいろな方がいるが、在日アジア人のお母さんは、数十年前は社会問題のカテゴリーとしてはなく、社会から見過ごされていると感じた。そこが嫌に感じ、活動している。
・ そのお母さんが得意なことを使ってそれを「仕事」にする。そこがこだわりの部分で、支援する、されるといったことでは上手くいかないと思う。私たちの店舗であれば、料理や洗濯をし、その対価でお金をもらいつつ、目の前で喜んでくださるお客さんがいる、という環境が人をすごく変えるということを実感してきた。なんとかビジネスとしてこの店を続けていきたい。
・ うちにはモルドバ人がいて、台湾人、タイ人がいて一緒に働くが、「多文化共生＝仲良し」とは思わず、理解することが最も重要。外国人に限らず、皆が一緒に生きていくので、皆同じ考えにならないといけないというのはおかしい。その人達の文化や生い立ちなどを理解しようとするのは誰にでもできること。その人々との接点が、私たちの場合は料理とか飲食店であったということ。そこが見えると、いろんな人が参画できる社会になると思う。

（ファシリテーター）

・ 外国ルーツのお子さんの教育など、教育問題も見過ごせないところ。引き続き発言をお願いする。

（参加者）

【外国ルーツを持つ子どもの支援、教育環境づくり】

・ 今いろんな自治体と協力して、子どもたちの教育やオンライン交流をしている。
・ 最近、国際交流で、大阪府泉南市と姉妹都市の生徒を繋いだことがあった。市立の小学校にアフリカのルーツを持つ小学生がいたが、日本語はたどたどしく、友達もいない状態で、泉南市長も我々も心配していた。ただ、実際にオンラインで（姉妹都市の

生徒と）繋がって事前学習を一緒にしていくと、日本の子供たちよりもリーダシップをとることが多くなっていった。英語を話すことができるアドバンテージを得て、交わりを持つようになり、毎回プレゼンテーションのファーストバッターはその子がするようになった。

・ 日本語で話す環境ではなかなか友達がいない、ということもあるが、オンライン交流で、ワールドスタンダード、グローバルスタンダードの環境を作ることで、フラットに事前学習や交流ができるのではないかという実体験がある。

（ファシリテーター）

・ そのアフリカルーツの子は日本ではなかなか出番がなかったが、世界と繋ぐと英語ができるのでチャンスが増えたということか。

（参加者）

・ 発言の機会を与えても言語の壁があってなかなか話すことができなかったが、ようやくスポットライトが当たった。そこで、次に繋げていこう、努力していこうという話になっていく。

（知事）

・ 経営されているアジアンバルには、ぜひ伺いたい。

・ 色んな国の人たちが料理や音楽など、共通の何かを持っていれば、皆で何かできていくというのは分かる気がする。経営をされて７年目と言うことだが、コロナ禍もあった中、よく続けてこられたと思う。

（参加者）

・ 自分たちもそうだが、思いを支えたいと思ってくれるお客さんがたくさん応援してくれて、今がある。自分たちの思いを周りに伝えることは、非常に大事。

（知事）

・ （違う国の人などと）理解し合うという場面は普段なかなかなく、行政の中でもそれほど多くないのだが、「理解する」ということはどういうことになるのか。

・

（参加者）

・ 飲食店は、ビジネスとして効率が大事なので、勤務時間中に従業員と話す時間はなかなかとれない。ただ、仕事外のところで、すごくゆっくり話をする。

・ 例えば、「鍋を下に置いてはいけない」というのは、日本では普通のことだが、土の上がキッチンで普段料理していた国の人とは文化が異なっており、理解してもらえない。普段のコミュニケーションから文化の違いを踏まえた上で話していれば、こちらの注意の仕方が変わるし、向こうも理解し、お互いの理解が深まる。面倒かもしれな

いが会話は大事。

・ 事前にコミュニケーションを取っているので、仕事中に向こうも分かったうえで注意をしてくれていると思い、聞いてもらえる。そこに時間をかける必要がなくなる。

（知事）

・ 先ほどの国際教育の話で、資料によると「子ども達の海外志向が 80%」と、最近の子どもは内向き志向といわれる中、少し意外な結果にも思えるが、その辺りはどのようにお考えか。

（参加者）

・ 友達というのが一つのキーワードとなっており、繋がる場所がシリアやアフリカのザンビアなどだが、そこの人と友達になりたいという小学生、中学生、高校生がいる。彼らの行きたいと言ったところには我々も一緒に行く。この夏にもフィリピンに行ったが、帰ってくると自分たちの地元の魅力に気づいたり、海外を知って次はもう少しこの分野を調べたいと留学を決意したり、一歩ずつでも次のキャリアに繋がっていく子どもたちの様子を見ていると、この事業を始めて良かったと思える。

（知事）

・ 国際的な経験を積むことについて、県としても応援していきたいと思っている。特に最近は円安で、例えば、本当は高校生も（海外に）行きたいけど行けない、という子どもたちがいるのであれば、やはり若いうちに１回でも出た方がいいと思うので、どのように応援できるか考えている。

（ファシリテーター）

・ 働いておられるアジアのお母さんの話や教育の話があったように、たくさん外国の方がおられる中で、生活の中で病気にもなったりすると思う。次は医療通訳について発言をお願いする。

（参加者）

【医療通訳による支援】

・ 神戸は多様な人が働いており、国際結婚も増えていて、お子さんは日本人、お父さんとお母さんは片方が日本人で片方がどこか違う国の方というケースが増えている。留学生も増えており、誰もがいつ病気にかかる可能性がある中で、やはりいきいきと活躍するには、万が一、病気やけがになった時に、誰もが安心して病院に受診できることが不可欠だと考えている。

・ 例えば、病気になった時に、日本語ができれば、自分で調べたり近くの人に聞いたりすることができるが、外国人には言葉の壁があり難しい。

・ 我々は、2003 年から独自に、通訳付きで安心して地域の病院を受診できる社会を作

っていきたい、という思いで活動してきた。現在は、県立病院２病院を含む県内の９病院が協力病院となっており、様々なアクターの協力を得て、年間 700 件から 1,000 件ぐらいの医療通訳を事業として実施している。

・ ただ、この広い兵庫県であっても、協力病院が９病院と限られているし、毎年助成金を得て事業をしており、一つでもアクターが欠けてしまうと立ちゆかなくなってしまうのが現状。なんとか持続可能なものにしていきたいところ。

（ファシリテーター）

・ 市内で開業されている「地域密着型のゲストハウス」についてお話をお願いする。

（参加者）

【人と人、地域を繋ぐ地域密着型ゲストハウス】

・ 人からよく、なぜ韓国から来て水道筋でゲストハウスをやっているのかと聞かれるが、「交流する場所を作りたかった」という思いがある。高校生の時から日本の学生さん達と学生交流をする機会があって、学生交流を通して友達ができたり仲良くなったり、いろいろ優しくしてもらって、そこからすごく日本に興味が沸いた。個人と個人が、国とか文化が違っても友達になれば良いし、そういう人が増えたらもっといい社会になるだろうし、そういうきっかけ作りをしたいと思った。

・ その中で思い浮かんだのがゲストハウス。何かを支援するというよりは、みんな楽しんだ結果、世の中がハッピーになるというのが一番良い。単なる宿といった泊まる場所、観光して泊まる場所を作りたかったわけではなく、人と人を繋ぎたかった。

・ 皆さん、外国人をあまり知らない、知らないのでちょっと抵抗感があり、怖いという感覚もあるかと思う。しかし、実際に繋がってどういう人なのかが分かると、すごく優しいし、助けてくれるし、私もたくさん助けられてここまで来ている。

・ 先ほど、神戸の差別化のポイントの話があったが、神戸の普通の姿が一番魅力的なのではないかと思う。それを好きな人が、観光客が普通に行くところではなく、こうしたゲストハウスにやって来ている。一緒に地域で楽しんで交流したり、一緒に地域の方と飲んだりしている。それで仲良くなって、友達になって、また会いに来てくれたりする。

（ファシリテーター）

・ 運営されているゲストハウスでは、食堂とかお風呂などをあえてゲストハウス内に設けず、地域内の温泉に行ってもらったり、水道筋商店街でご飯を食べてもらったりしていると伺った。

（参加者）

・ そのとおり。地域に泊まる場所がなかったため宿泊機能をつくったが、飲食は地域に既にある環境を活かすよう案内しており、自然と地域交流ができるようにしている。

・ そうして、地域が好きになって何回か泊まりに来るようになって、だんだん住みたいということになり、30 人以上が近くに移住してきている。そこでまた仲間が増えて、コミュニティができて、すごくいい流れができている。

（知事）
・ 医療通訳について、おそらくこれからますますニーズが高まっていくと思う。これは「ひょうご多文化総合相談センター（外国人県民インフォメーションセンター）」から何か紹介みたいなものがあるのか。それとも病院から直接連絡があるのか。

（参加者）
・ 仕組みとしては、病院で受診の予約を取る時に、医療通訳もその協定病院の中で予約ができるようにしているが、実際には日本語ができないので、病院を予約すること自体が難しい。それは、先ほど知事がおっしゃったワンストップの相談センターで、どういう症状なのか、どこに住んでいるかなどを聞いて、相談予約をしていただくところまでは電話で、予約を受けた後は、専門の医療通訳ということで、こちらで対応している。協力し合って、すみ分けをしてやっていこうと進めようとしているところ。

（知事）
・ データを見ると、総合相談センターの相談の２割以上は医療関係と、やはりニーズが高い。これからもっと外国人の方が働く場が増えてくると思うので、現在、県立の２病院含む県内の９病院が協力しているとのことだが、県としてもっと裾野を広げていかなくてはいけないと思っている。

（参加者）
・ コロナが収束をしつつある中、今後はインバウンドが見込まれ、万博も開催される。医療通訳が地域にあれば、万が一海外からお客様が来られた時もすぐに対応できる。医療の厚みにも繋がると考えている。

（知事）
・ 相談したり通訳をつけたりするのはどういう方が多いのか。収入はそれなりにある方なのか、旅行者向けなのか。

（参加者）
・ 今は地域に住んでいる住民の方向けのサービスとして考えており、日本に住んで、日本でもらえるお給料で払える通訳料というのにこだわっている。先ほど申し上げた同行通訳が 2,750 円、そして遠隔通訳が 1,650 円という料金設定。ヒアリングをして、いくらだと払うかという形で設定した。やはり 5,000 円を超えてくると高い、という意見があった。

（知事）

・ 12 年前に日本に来られて、水道筋でゲストハウスを開業された理由は何か。水道筋は、私もよく行くので。

（参加者）

・ 宝塚出身の妻が神戸のことを教えてくれて、古いコミュニティがあるところはどこだろうと、神戸にある商店街を回っていた。その中で、水道筋は昔のものも残っていながら、新しくもあるというバランスが良かった。食べ歩きもできる。近くには温泉もあり、地域と相性が良かった。
・ 水道筋は活動しているプレイヤーがよく見え、コミュニティの中に自分が入り易かったことも一因としてある。自分も地域と一緒になって人を呼び込んで、盛り上げられたら、と思っている。

（知事）

・ 水道筋商店街の方々は温かく、とてもいいところを選ばれたと思う。先ほども話があったが、ゲストハウスというものは単に宿泊するだけでなく、少しまた違う多面的な機能をつくり始めているような気がする。注目すべきところ。

（参加者）

・ 地元の方と最初からコミュニティを作っていったので、地域を巻き込んで、みんなで声を掛け合いながら DIY で作った。

（知事）

・ ただ泊まるだけではなく、先ほどの話ではないが、少し悩まれている方がシェルターのような感じで、駆け込み寺のような意味合いもあるのだと感じた。

（ファシリテーター）

・ 確かにゲストハウスは増えていて、いろいろな意味を持つゲストハウスも多くなっている印象がある。
・ それでは、後半は「賑わいを創出し続ける神戸地域」というテーマに移っていく。今回、神戸市ではなく兵庫県の主催なので、「兵庫県の中の神戸」という観点を頭に置いて、ご発言いただきたい。
・ 震災以降、スティールパンの普及の活動をしておられ、スティールパンを通じて長田を活性化していきたいという要素もあったかと思うが、その取り組みなどについて、ご発言をお願いする。

（参加者）

【新長田を拠点にスティールパンで広がる活動の輪】

・ 私は新長田に生まれ育って、今も新長田で暮らしている。本当に良いところで、コミュニティも温かい。しかし、震災でそこも半分火事、半分は全壊した。その壊滅的な中で、希望や勇気などのシンボルとしてスティールパンを演奏するようになった。
・ 私はこのスティールパンというものを演奏するために、皆が新長田に来るまちにしたい、という思いをメンバーと共有しながら活動している。イベントは一過性のものになるが、震災後のまちの復興はずっと続いていく。スティールパンを日本でやるなら神戸・新長田のまちがあるといっていただけるような活動にもっていければと思っている。
・ 実際に年１回、日本全国、海外からアーティストを呼んだりもするが、日本中のスティールパンバンドが集まってくる。神戸スティールパンカーニバルというもので、今年で 23 回目、コロナ禍でも開催してきた。その際も、どこに集まる、どこで宿泊する、打ち上げするとなった時には、だいたい新長田で行われている。それだけ新長田というまちがスティールパンに対して優しかったり、人に対して優しかったり、すぐ仲良くなれる場所となっている。水道筋もそうだが、各地にこのような魅力を持った地域が生まれたら、神戸はさらに良いまちになるのではないかなと思う。

（ファシリテーター）

・ 続いて、芸術や農業による賑わいづくりについてのお話をお願いする。

（参加者）

【文化がまちを充実させ、人が人を集める】

・ 先週まで２週間、オランダのアムステルダムに行ってきたが、あまりにも良すぎて、帰ってきた時に神戸が寂しく見えるほど、まちの中に文化がものすごくあった。いろいろな文化活動がまちの中で、あらゆるところで繰り広げられていた。もっともアムステルダムは特殊で、まち全体で多様な人を受け入れる施策をしている。私もすごく話しかけられたり、道案内してもらったり、「家に泊めてあげる」と言われたりした。
・ 人が人を集めるというのが私の持論。建物でも街でもなく、人が人を集める。それがアムステルダムでは象徴的に思えた。長期的に見ると、AI がいろいろ進化し、多分半分くらいの時間、仕事をしなくても良い時代に突入していく。そこで何をするかといえば、やはり文化や芸術。だとすると、音楽や絵画などを皆がにじみ出るようにやれるような環境やまちでないと楽しくないのではないかと思う。私は農業もそういう思いでやっている。食べることは重要。自分で作って食べられるともっと良い。そんな思いで、まちに農業が広がれば良いな、と活動している。

（ファシリテーター）

・ ファーマーズマーケットをずっと仕掛けてこられているが、食での賑わいや可能性について、もう少し話をお聞かせいただきたい。

（参加者）

【食の重要性と兵庫農業の可能性】

・ 食に関して言うと、私自身、実は食べることに興味がなかったが、８年前、ある農家さんとたまたま関わりだしてから、のめり込んだ。食は現代社会にとって一番重要な問題であると思っている。メンタルヘルスの問題や身体の調子が悪いというものは、根源的に健康的な野菜を食べられていないからだと思っている。
・ 近所の人から野菜が買えない。例えば神戸産の野菜が全然買えない、兵庫県産の野菜もあるにはあるが、それほど流通しているわけではない。もちろん背景には、物流の問題もある。しかし、そうではなく、もっと近くで買えるよう自分たちの土地で自分たちが作る。兵庫県の一番の可能性は、農地に近くて農地が山のようにあるところ。今後どんどん空き地ができたりしていく中で、みんながそこで農作業をする。私たちは２週間に１回農作業をするが、その技術をしっかりと農家さんから教わってやれば、良いコミュニティにもなるし、それこそ多文化で一緒に作業をしていく中でおじいちゃんおばあちゃん、子どもとも仲良くなれて良い。
・ アーバンファームは技術がすごく難しく、技術力を高めることが課題になるかと思うので、兵庫県の方で高めていただければいいのではと思う。

（知事）

・ スティールパンの話。新長田愛がとても伝わってきた。ローカルから進めていくことが大事だと思っていて、そうすると、音楽から世界一、ローカルからグローカルへ繋がっていく。それが震災をきっかけに続けられているのはすごいことだと思う。また演奏を聞かせていただきたい。
・ 賑わいづくりについても、貴重なお話を聞かせていただいた。生産性が高まってくると、逆に空き時間ができてくる。そういったところに余暇なのか別の活動なのかどうライフスタイルを変えていくのか非常に興味深い。
・ 兵庫県もこれから在宅勤務を進めていくが、そうすると通勤時間がなくなり、人によっては１時間、２時間のオフ時間が増える。その空いた時間を自分のライフスタイルの充足に充てる以外でも、子育てや介護、地域のコミュニティ活動、例えば自治会の担い手が大変だとかあるが、そういったコミュニティに職員も参画していくことも考えられる。それはおそらく全体的に広がっていくと思う。
・ 食に関しては、オーガニックや有機農業に対する関心やニーズが高いなと感じる。農業全体は担い手が少ないと言われるが、有機、オーガニック野菜に関しては教室を開くとたくさん申し込みが入るという側面もある。兵庫県もこれから小規模農業、もっともっと人材育成に力を入れていきたい。

（ファシリテーター）

・ 兵庫県には農地がたくさんあり、可能性があるというお話されていたが、私の働く本

部事務所は東灘区にある。その軒下をお貸しして、火曜日と金曜日に朝市をしており、そこで丹波の人が丹波野菜を販売している。その方はUターンで丹波に帰って農業をやっているが、なかなか売る所がない。だから丹波で作った野菜を神戸で売ろうということで、現在、軒下をお貸しして流通販売ということで売っている。すると、ものすごく売れる。８割くらいがオーガニックで、モノも良い。

・ 彼はそれで仕事としてやっているし、神戸の人たちは新鮮な野菜を買うことができて嬉しいし、私たちも軒先代払ってもらって潤うし。ハッピー・ハッピー・ハッピーというようなことが、農業を通じてできるのだなと感じたところ。

（知事）

・ オーガニックは不思議なもので、どんどん作ってくださいというと売るところがない、どんどん売りましょう、学校給食で使いましょうというと作ってくれるところが少ない、という卵が先か鶏が先かという話になってしまう。私はどちらと言わず、人材育成に特化しようと考えていて、県に農業大学校というのがあって、再来年ぐらいに、そこに有機農業専門のコースを作りたいと思っている。そうすると、年間 20 人～30 人ぐらい、おそらく社会人だと思うが、意欲のある人がどんどん輩出されるようになれば、売るところというのは自分たちで工夫しながら広がっていくと思うので、人材育成からブレイクスルーしていきたいと考えている。

（ファシリテーター）

・ 続いてインナーツーリズムのお話を伺いたいと思う。「ひょうごフィールドパビリオン」にも認定されている活動について、お話いただきたい。

（参加者）

【アプリで発信、地域の神話・伝説】

・ 「たまむすび」というアプリで「ひょうごフィールドパビリオン」に認定されている。神話とか伝説とかを情報発信するコンテンツ。始めたきっかけは、神戸地域も三宮など比較的栄えた地域から少しでも離れると、例えば北区だと茅葺き屋根がたくさん残っていたり、農村歌舞伎をやっていたり、文化が残っているものの、結局地元の人や近隣の人にしか分からない。そういった情報は発信しているつもりでも、外の人には十分伝わっていないのではないか、という問題意識がある。

・ 神話や伝説というのが、まちを成り立たせている一部の要素でもあるということが伝われればよいと思っており、それをこのフィールドパビリオンで海外の方に発信したいなと考えている。欧米の方は、日本の文化とかにすごく興味がある。日本人が歩いていて神社や仏閣があっても、「おっ」となることは日常ではあまりないかと思うが、そういった気づきを与えるきっかけになれば良いとも思う。

・ もう一つは、住んでいるまちにどういう成り立ちがあるのかなど、子どもたちに少しでもわかりやすくアプリを使えればいいなと思い、始動した。今の子どもたちは、極

論、インターネット上にない情報はもう世界にない、というくらい、ネットで調べて出てこない情報は「ないもの」とされてしまう。アプリを通じて自分の住んでいる地域の魅力を知ってもらえれば、と思っている。

（ファシリテーター）

・ 灘五郷もフィールドパビリオンに認定されている。灘五郷と関連した活動をされているということで、今回のテーマについてお話を聞かせいただきたい。

（参加者）

【宇宙一の日本酒造りを育む風土とつながり】

・「ありがとう」を研究して 13 年目になる。「有り難し」とは自分の中では、「当たり前」ではなく「奇跡」だなと思う。人の「当たり前」は解釈の具合で全く変わると思うから、今日の出会いも「奇跡」と思っている。このように意識が変わると景色も変わるし、景色が変わると意識も変わると思う。
・ 自分は 10 年ほど東京に行って戻ってきたが、地元のことを客観的に知ることができた。それまで地元の景色という当たり前で、なかなかその奇跡に見えてこなかったということがあった。少し意識を変えることで見える景色もあるかな、と思っている。
・ 私が今やっている酒所の事業も、地元の人にもそこまで知られていないと思う。日本酒がどこで一番作られているかというと、新潟ではなくこの灘が一番、つまりは世界で一番作られている。最近は「宇宙で一番」と言っている。これは自然環境によるところが大きい。神戸は海と山が近いというところが面白いと思っていて、六甲山のおかげで山の向こうが盆地になっている。台風が来た時に風の影響を受けづらい、山田錦を育てやすい環境がある。冬場に吹き下ろす北風の六甲おろしによって発酵の温度管理ができる。六甲山がかこう岩で、水のミネラル分も非常に豊富なので、発酵させて非常に力強い唯一無二の男酒ができる。（神戸の）目の前が海なので江戸前まで酒が運べたこと、海と山が近いので 24 時間お米を研げたなど、宇宙で一番酒づくりが出来ているのには、この風土というものが関係している。こういった、皆さんにあまり知られていないことも広がっていけばいいな、と思っている。
・ 最近は、酒蔵の中で灘の酒を料理とともに楽しめるようにしている。海外からの旅人も増えてきている。旅先で人が繋がるということは一番面白いこと。酒所でも一緒に繋がることのできる企画を行っている。
・ それから、兵庫県の中の神戸ということで、これは面白い切り口かなと思っている。旅人は時間がない。しかしこの兵庫県だと、山に温泉、海に島もありながら、一日で全部周ることができるというところは、一気に詰め込みたい旅人を呼び込む切り口になるのではないか。

（ファシリテーター）

・ 神戸市には、（日本酒の）乾杯条例みたいなものがある。乾杯条例もあまり知られて

いないこともある。確かに、日本酒の潜在価値がもう少し広がればいいと思う。

（参加者）

・改めて僕らのやっていること、コロナ禍を経て、改めて人の温度感が伝わることが非常に大事。江戸時代からおそらく日本酒を酌み交わすことがあったのではないかと思うが、やっぱり大事。酒所の入口で人を集めて「今日は一期一会です！」と言って、皆の熱を上げるということもやっている。それもすごく盛り上がる。人の温度感が伝わると、やっぱり盛り上がるなと思う。

（ファシリテーター）

・ 最後に、神戸の PR やリポートをされている視点から、兵庫県と神戸地域に感じることについて、お話いただきたい。

（参加者）

【アベンジャーズ、兵庫・神戸の魅力を発信するために】

・ 今日はアベンジャーズみたいな会だなと思って楽しく聞いていた。円卓状になってアベンジャーズが語ってそれは最高に面白い。しかし、それが映画化された場合、どのように広報を打つかによって集客は変わる。いろいろなコンテンツの入口があるように思う。
・ 兵庫県と神戸の一番弱いところは、広報だと個人的には思っていて、たくさんの方がお話されている中で、住んでみたら良かった、というような印象をすごく受けるが、私も同じ感覚を持っている。大阪で育ち、学生時代は京都で過ごした。京都人は、京都のことをよく語ることができ、自慢もできる。大阪人も同じ。
・ 一方、神戸は控え目になって、入ってみないと魅力が見えない。関われば、ありとあらゆる豊かさがある。最先端なものもあれば、昔ながらのものもあり、自然もあり、自然の中で守っている文化もある。それが入りきらないと見えないというのが、（神戸の）弱さなのではないか。例えば、京都、大阪、奈良というのは、神戸・兵庫と違ってメインビジュアルが見えやすい。
・ 今日の話で一番面白い話というのは、昔からみんなが知っている神戸ではなく、掘ったら面白いという魅力。しかし、それをどうして隣の人、隣の県の人に伝えることができてないのか、そこが大きな考えるポイントだと思う。
・ それは、神戸も最初に兵庫県の魅力をもっと知るべきではないかと思っている。広域に神戸の地域だけでもこれだけ魅力があるが、日本海に出向いたり、瀬戸内海に出向いたり、他の都道府県に行かなくても旅行先はいくらでもあるというところを、神戸の人間が掴んだ情報を、兵庫県全体にリリースする力を持つことが、今後神戸・兵庫が強くなっていく術なのではないか。そのためにすごいアベンジャーズが揃っている。

（ファシリテーター）

・ お三方からの話に対するコメントと、ひょうごフィールドパビリオンの紹介を知事からお願いしたい。

（知事）

・ 参画いただいているひょうごフィールドパビリオンについて、これは私が知事になって最初にスタートしたプログラムの一つで、2025 年の万博は、会場だけでなく、外のプログラムの充実も非常に大事なのではないかというのが、元々の問題意識と仮説設定。兵庫は大阪の隣であるのだから、兵庫全体のこのすばらしい魅力と取組をこの機会に発信し、訪れてもらいたい。そういったコンセプトがひょうごフィールドパビリオンである。パビリオンを新たに県内に作るというよりも、取組の現場そのものがパビリオンであり、本日の会の皆さんの取り組みも全てはパビリオンになる。現場そのものをパビリオンと見立てて色んな人に来てもらいたいという思いがある。これまで特に何か補助金を出させていただいているわけではないが、現在 156 のプログラムに手を上げていただいており、今もどんどん増えていっている。
・ これをネットワークでどんどん繋げていって、（2025 年は）震災から復興 30 周年でもあるし、地場産業や農業、まちづくり、地域コミュニティ、それぞれの中に様々な素晴らしい取組がある。それこそが日本が成熟したこの社会の中で、世界から期待されているもの。最先端のテクノロジーも大事であるが、皆さんがまさに今日話された色んな取組そのものもすごく大事。海外の人からするとすごく興味があり、それこそ伝えるべきことではないかと思う。それをパビリオンにすべきだというのが私の思いである。おっしゃるように、兵庫ではこんなすごいことをやっている、ということを兵庫の子どもたちに知ってもらいたいし、是非皆さんにもやってもらえればと思う。
・ 人が繋がっていく場を広げていくことが大事。アムステルダムでの繋がりから思わぬ展開があったこと、これは地域で開催される祭りに行くと同じようなことがあって、予定なしに出会った人に紹介されて、思わぬところで繋がって、という楽しさがある。今回の万博の機会がそうなのかもしれないが、そのような機会をもっともっと増やしていければ、観光地を巡る以外の、繋がりから広がっていく話になるのではないかと思っている。
・ 今日は「ひょうごフィールドパビリオン」という取組をやっているということだけでも、覚えてもらえればと思う。

（ファシリテーター）

・ 「賑わいを創出し続けるまち KOBE」を後半のテーマとして話してきた。賑わいといっても、繋がりづくりが面白い、普段の神戸が面白いということから、もっと兵庫・神戸のことを知って発信していくことがポイントになると思った。
・ それでは、最後に知事に会を締めていただきたい。

５　知事閉会挨拶

・ 皆さんそれぞれいろいろな立場での活動を聞いて、とてもワクワクしたし、皆さんの活動をもっともっといろんな人に知ってもらって、人の繋がりをつくっていければと思う。観光客やインバウンドの方も、その地域に行けば、そこからすごく人との繋がりが広がっていく。そういうものをもっと増やしていきたい。
・ この後、日本酒のイベントにも参加するが、日本酒も含めていろんな魅力が神戸、兵庫にはあるので、いろんな取組を広げていきたい。